昭和36年

報道
解説
評論

朝日ジャーナル

Vol. 3
No. 43
40円
10・22

昭和三十四年二月二十日第三種郵便物認可
第巻第百三十七号（日曜日）発行（昭和三十六年十月二十二日発行）昭和三十四年四月四日国鉄東局特別扱第一種郵便物

〈景気調整と日本経済＝土屋　清〉／〈成長政策批判と社会党一国会の論議から＝編集部／〈連載・良心一立ち入り禁止　往復書簡〉第２回

本
批評と紹介

《書物の周辺》

★ シェイクスピア全集
福田 恆存訳
1 大衆社会の政治
コーンハウザー 辻村明訳
2 写真集・中近東諸国
牟田口義郎

《書物の周辺》

舞台のための翻訳

福田恆存訳『シェイクスピア全集』

永川玲二

「もっと肥っていてもらいたいものだな」とシーザーのせりふで観客席はどっとわいた。一〇月五日の夜、文学座公演『ジュリアス・シーザー』の一場面だ。舞台の片すみでは、やせっぽっちのキャシアスがひそひそと立ち話をしている。なんとなく反シーザーの陰謀らしいにおいがある。そのシーザーははなやかな衣装で舞台の中央に立ちはだかり、快活なアントニーにむかって、やせてひもじそうなヤツはどうもいかん、とかくものを考えすぎるから危険だという。アントニーはキャシアスを弁護してやる。「お気を使われるには及びますまい。危険な男ではございません。あれは高潔なローマ人、どく気のいい男でございます」

「もっと肥ってもらいたいものだ……」

どっとわいたというのは誇張だったかもしれない。むしろ大量のくすくす笑いが、しばらくのあいだ観客席をみたし、長い尾をひきながら消えていった。

それはしかし、まことに幸福な笑いだった。ぼくたちは心から、思わず笑ったのだし、しかもびのびと笑えた。翻訳劇の舞台から、この種の幸運はめったに落ちてくるものではない。

たとえば、その三〇分後にもう一度まきおこった笑いは、それほど幸福なものではなかった。暗殺の当日、シーザーはさまざま不吉な前兆の報告をうける。そのひとつとして、占い師たちがその朝「生贄(いけにえ)の腹を裂きましたところ、その獣に心臓が無かったとのことでございます」。ついふきだしてしまった数十人の観客が、あわてその笑いにブレーキをかけた。この場面は、ほんとうは、物々しい不吉な場面であるらしいのだから。

あきらかな訳者の意図

翻訳者の身になってみれば、これだから芝居の翻訳はこわい。誤訳でもなく、悪訳とさえいえないような個所が、誤訳以上に悪質な効果を発揮してしまうことは、小説や論文の場合にももちろん珍しくないけれども、こわれてしまった舞台の空気はとりかえしがつかない。どんなに見当ちがいな笑い声も、ぼくたちが劇場から持ちかえる最終的な印象のなかに、確実に組みこまれてしまう。

福田恆存氏は読むためではなく、舞台にかけるためのシェイクスピア翻訳をめざした。しかもそれを自分の演出で舞台にかけるために。これほど意図のはっきりした翻訳は逍遥いらい(木下順二氏の『オセロウ』など)ごく少数しか現われなかったし、それが当然だったかもしれない。シェイクスピアの劇は、なんとなく日本語におきかえるだけでも膨大な労力と工夫とを要する。そのまま舞台にのる生きた言葉——という条件までが加われば、ほとんど不可能な作業になってしまう。

しかし、シェイクスピアはなによりもまず生きた言葉の名手だった。かれの登場人物たちのせりふは、どんなに抽象的な内容をもっていても、かならずそこにいるだれかを笑わせたり、怒らせたり、感心させたり、眉をしかめさせたりするための言葉なのだ。皮肉はいつもするどく、怨恨は深い。シェイクスピアはひとつとして人畜無害なせりふを書かなかった。

だから、すこし極端ないいかたをすれば、英文和訳としてどんなに正確であっても、聞いていて眠くなるせりふがならんでいれば、すくなくともそれはシェイクスピアの翻訳ではない。

逍遥以後、舞台をあまり意識しない翻訳が多くなったことの結果として、ぼくたちは生きた言葉としてのシェイクスピアを次第に見うしなってしまった。意味を正確に伝えようとするあまりに言葉の勢いはとかく犠牲にされる。読む芝居では、これはやむをえない犠牲といえるかもしれないけれども、舞台にのれば、たちまち致命的な欠陥になる。自分の目のまえで、間の

福田恆存訳『シェイクスピア全集』

第1巻	リチャード三世	259ページ	35年
第2巻	じゃじゃ馬ならし	205ページ	35年
第3巻	ロメオとジュリエット		(未刊)
第4巻	夏の夜の夢	176ページ	35年
第5巻	ヴェニスの商人	197ページ	35年
第6巻	ヘンリ四世		(未刊)
第7巻	から騒ぎ		(未刊)
第8巻	ジュリアス・シーザー	251ページ	35年
第9巻	お気に召すまま		(未刊)
第10巻	ハムレット	231ページ	34年
第11巻	オセロー	277ページ	35年
第12巻	リア王		(未刊)
第13巻	マクベス		(未刊)
第14巻	アントニーとクレオパトラ	272ページ	36年
第15巻	あらし		(未刊)

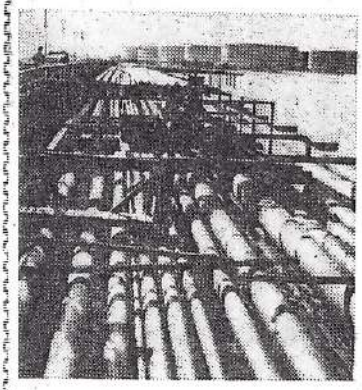
(B6判 既刊各巻350円 新潮社)

目で見る民族主義

――牟田口義郎『写真集・中近東諸国』

昭和三二年の夏から三五年の春まで、朝日新聞特派員としてカイロに駐在し、エジプトを中心に広く中近東諸国を歩いた著者は、暖かい目でとらえた読みやすい記事と興味深い写真で、朝日の読者をよろこばせていた。その牟田口氏が写してきた数多い写真を、「人と自然」、「文明の遺産」、「宗教の世界」、「民族主義」、「石油と運河」、および「国さまざま」の六つの主題に分けて、それぞれの主題ごとの短い文章とともに、三〇〇ページの美しい写真集にしたのが本書である。

巻末に重要年表や地図をつけているのは、写真をたのしむものに参考になるが、とくに、この写真集の後半は「国さまざま」が占めているので、地図は一般の読者には大きい役割をもつ。それほど中近東諸国には共通の風景や風俗が多い。いきなりどこかのページの写真を見ただけでは、どの国の写真かわからないほどである。そこで「中近東案内」という著者の巻末の文章、とくにその中の「旅とカメラ」でも読んで、各ページの写真を眺めると、味わいはいっそう深くなる。



ラス・タヌラ港の石油パイプライン

「民族主義」という主題は、長く一地域にいた新聞特派員でなければ、カメラでなかなかとらえられないものである。この分類にはいる写真は本書の中でも多くはないが、エジプトとシリアの合邦を祝うダマスカス市民のデモ（一三二～一三三ページ）などは、すでに歴史的な価値をもつといえよう。

写真の不得手な私は、ただ感心して一枚一枚を楽しむばかりであるが、欲をいえば、ギリシャやキプロスのかわりに、リビアからモロッコにいたるアラブ諸国を入れてほしかったと思う。戦時中の中近東という地域概念はギリシャまで含んだが、今日の中近東はむしろアラブ北アフリカを含むからである。

（B6判　二九八ページ　八〇〇円　修道社）《国会図書館労働課長・西野　照太郎》

むたぐち・よしろう　大正一二年生まれ、朝日新聞東京本社外報部員。昭和三二年から三五年春までカイロ支局長。

びした冗談や退屈な大演説ばかりを、たえず大声にわめいている人物にたいして、尊敬や愛着をいだくのはむずかしいことだし、そんな連中の葛藤や運命に切実な関心はもてないだろう。したがって、その芝居全体がぼくたちにとってどうでもいい出来事になってしまう。

シーザーのせりふがまきおこした幸福な笑いによって、シーザーの死という事件は、ぼくたちにとって多少とも切実な出来事になった。もちろん、「肥った男にかぎる」云々のあのせりふは、精神病理学や性格学の書物にたびたび引用されるくらいだから、きまじめな論文調に訳しても十分面白いだけの内容をもっているし、その部分だけについてみれば、たとえば坪内訳（「もっと肥っていりゃ安心だが！」）と福田訳との差は紙一重にすぎない。しかしそれは、まことに貴重な紙一重だった。その分だけ『ジュリアス・シーザー』という芝居は感動をましたのだし、その分だけぼくたちはシェイクスピア自身の言葉にちかづいたのだから。

ふくだ・つねあり　大正元年生まれ。文芸評論家、英文学者。主な著作『芸術とは何か』『芥川竜之介論』など。

きわだった三つの特色

生きた言葉を手にいれるために、福田氏はさまざまな新しい工夫をめぐらし、そのひとつひとつが氏の翻訳の特色になっているが、ここではとくに目立ったものだけを三つあげておこう。第一に原文の語順を可能なかぎり忠実に守ろうとしたこと。第二に、敬語をできるだけ少なくしたこと。第三に、最近の翻訳としてはかなり古めかしい語彙（ごい）を多くもちいていること。

まず敬語についていえば、省略はほとんど例外なく成功している。むしろ、もっと省略すべきだと思われる個所がまだ目につきすぎるくらいだ。さっきのアントニーのせりふを例にひけば「オキオツカワレルニワオヨビマスマイ」では、観客が「気を使う」という日本語を思いだすまでに少し時間がかかってしまう。

語順に関しては、それを忠実にまもることによって、原文のめりはりが生かされた場合が多い。ただ、ここではときに徹底しすぎたための欠陥が目につく。英語の語順を追えば日本語としては倒置法の連続になるし、倒置法はしばしば強烈な表現効果をもっている（シェイクスピア自身も語順破壊の常習犯だった）。けれども、破格の連続はときに規格品以上の単調さにおちいる。どく平明な意味をのみこむためにも絶えず努力をしいられ、せっかくの場所ではむしろ倒置法の効果がうすくなってしまう。

古めかしい語彙については、

功罪相半ばするとでもいうべきだろうか。ぼくたちは現在、ひどく貧しい語彙や語法だけでまにあわせる生活をしている。明治以前の日本人たちが、主として唐詩や漢籍から仕入れて使っていたような、簡潔さとリズムと壮大なイメージとを兼ねそなえた表現は、ほとんどすべて生活の場から消えてしまった。その貧しい日常語だけでは、とてもシェイクスピア劇のような、言葉たちの豪華な饗宴にあずかることはできない。というより、シェイクスピア翻訳というひどい骨折り仕事の最大の意味は、たえずむりをしいられることによって、現代の日本語のなかに、古い語法や新しい工夫をできるだけ多くもちこみ、すこしでもその表現力をひろげることではないだろうか。

しかし、そのためには、古い言葉があくまで新鮮なひびきを発するような工夫を要するだろう。大げさな、あるいは大時代な言葉をシェイクスピアはたびたび遠慮なく利用しているけれども、それでいて、たしかにどれもシェイクスピアの言葉になっているのは、けっしてそれが退屈なせりふに終わらないからだ。ほんのわずかなゆがみが、規格品にいつも思いがけない陰影をあたえる。登場人物のだれかがもし空虚な言葉を口ばしったとすれば、その空虚さは、かれの心理状態や個性の空虚さを的確に表現している。

生きた沙翁

への期待

「その一生は和して従い、円満具足、中庸の人柄は……」などという名文句は、名士の弔辞にふさわしい口調のよさや無内容さはあっても、アントニーの悲しみや敬意にふさわしい簡素な新鮮さは失っている。それに、和して従い云々から浮かんでくる人物のイメージは、ブルータスとはおよそ縁の遠いものだ。「円満具足」な人物がはたして、共和主義ローマのためにシーザーを殺したりするだろうか？

古い言葉をもちこむ場合の最大の危険は、かつてその表現を生み、それを使って生活していた社会の美意識や倫理や生活感情までをそっくり持ちこんでしまうことだ。符号になりきっていないかぎり、どんな言葉もそうした膨大な背景をひきずっているし、些細な表現の集積によって、その背景はいつのまにか作品全体のなかに根をおろしてしまう。

ブルータスの友人たちが彼にあまり敬語をつかわないおかげで、ローマの共和主義は舞台のうえでひとつの実体を獲得し、かれらの葛藤や悲劇はそれだけ切実なものになった。逆に、露骨に仏教的あるいは儒教的な表現は、深い部分でローマ人たちの世界を着実に掘りくずしてしまう。さらに、もしその表現がぼくたちの生活のなかですでに手アカにまみれ、物わかりのいい利殖家などの語彙になり終わっていれば、その人物の体臭が何人かの不幸なローマ人にしみついてしまう。

福田恆存氏は、生きたシェイクスピアをぼくたちにあたえるという大事業と取り組んでいる。舞台というきびしい場所で、演出家として、観客たちが作品からうけとる最終的なイメージまでを考えながら翻訳するということは、劇の翻訳者として最も困難な、そして理想的な条件だろう。多くの成功した個所、しなかった個所を、かれは観客の反応から直接に検証することができる。そうした貴重な経験の集積によって、ぼくたちはやがて生きた言葉——のびのびと笑いながら劇場でそれをたのしみ、次の日からさっそく喧嘩をしたり、恋をしたり、愚痴をこぼしたりするとき利用できるような言葉で——シェイクスピアを聞く幸福にありつけるだろう。

《ながかわ　れいじ・東大講師》

ほんものの大衆社会論

W・コーンハウザー　辻村明訳『大衆社会の政治』

吉田健一氏の井上靖論に、『猟銃』のもつ暗さ、哀歓の面白い分析があった。日本の恋愛につきまとう白々しさは、日本には外国で用いられる意味での〝階級〟というものがないからだと氏はいう。『クレーブの奥方』『赤と黒』のような小説は、階級の対立や社交上の拘束が厳然たる社会的事実として存在する西欧でのみ生まれる。登場人物に異常な生気を与えるのは〝階級〟という剛体の存在なのだ。さすがは西欧というものを皮膚で知っている吉田氏の言葉だと思った。

日本的大衆論の歪みを正す

われわれは、ともすると西欧で生まれ、育った〝階級〟とか〝社会〟とか〝マス〟という観念を、ただ概念として理解しやすい。わが国で一時、熱っぽい流行をみせた〝大衆社会論〟にしても、もともと〝大衆社会論〟というものが西欧における〝階級社会〟の解体、権威の喪失感からくる危機意識にふかく根ざした理論であるという、初歩的な理解が欠けていたように思える。

本書は、そうした日本的な〝大衆社会論〟のゆがみを正し、オーソドックスな大衆社会論の何たるかを知る上に、たいへん便利な本である。〝便利な〟という意味には多少〝教科書的な、図式的な〟という意味も含まれているが、お手軽な入門書というわけではない。

あざやかな理論づけ

三部一三章からなる本書の中で、とくに教えられるのは、第一部「大衆社会の理論」で、複雑多彩な理論的系譜を丹念にたどり、それらを二つの系列にまとめて説明する手ぎわはあざやかの一語につきる。第一の系列は、一九世紀のフランス革命に対する反動とし